

《眼科臨床エキスパート》 知っておきたい眼腫瘍診療

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信 シリーズ編集 大島浩一, 後藤 浩 編

この《眼科臨床エキスパート》シリーズは眼科実地臨床のエキスパート達が自らの知識と豊富な臨床経験に基づいてさまざまな疾患の解説を行うものであり、臨床眼科医必携のシリーズである。本書のように、テーマによっては項目の最後に「一般眼科医へのアドバイス」という実際の症例に遭遇した時の診療の注意やコツまで記載されているタイトルもあり、専門外の読者にとってはありがたい。

しかし、シリーズ新刊『知っておきたい眼腫瘍診療』でまず衝撃を受けた（読者の先生方はこれから受けるであろう）ことは、その圧倒的なボリュームの多さである。総頁 459 ページというまさに圧巻の解説書である。しかも内容も素晴らしい。総論に 200 ページ余りを費やして、大きな分類ごとに「疫学的事項」から始まり、「初診時の外来診療—どう診てどう考えるか」「診断・治療に必要な検査」「治療」を非常にわかりやすく解説しておられる。これは眼腫瘍専門家ではないものの、時々眼腫瘍を診療する機会のある私たちにとても非常にありがたい。

最近の他のシリーズものでは編者らによる総論が全体の 1 割から 2 割程度で、あとのほとんどは分担執筆による各論の疾患の解説というものが多。しかし、このシリーズでは総論に重点が置かれているタイトルが多いようである。本書も前半は編者の大島浩一（岡山医療センター眼科医長）、後藤浩（東京医科大学教授）両氏の識見に基づいた、眼腫瘍全体の診療の仕方が勉強できる、まさにそれだけで一冊の教科書である。また、総論には最後に「Topics」が 6 項目挙げられており、抗がん剤や放射線治療に伴うさまざまな眼合併症から悪性黒色腫に対する分子標的治療薬まで、最新の治療の動向が理解できる。

各論では、これまでの成書では軽く触れられているだけであった眼瞼腫瘍、角結膜腫瘍にも多くのページが割かれている。特に、良性の尋常性疣贅、伝染性軟属腫、乳頭腫やリンパ管腫などは、日常臨床では非常にありふれたものでありながら多くの成書や雑誌の特集にはほとんど記載されておらず、手術や OCT などの検査ばかりしている大学のレジデントや後期研修医にとって、診療が苦手な疾患である。これら眼科のいわば common disease についても丁寧に記載されている。

一方で、本書の後半は眼腫瘍の専門解説書としても一流の内容であり、臨床現場でそれぞれの疾患に遭遇した際に知識を補うために繙くための本でもある。臨床所見の特徴、鑑別診断、治療方法について非常に具体的な記載があり、さらに治療に伴う合併症や予後と経過観察（どのような治療をいつまで行い、どのような間隔で経過観察を行えばよいのか等）についても数字を挙げて解説している。

確かに眼腫瘍自体の頻度は緑内障や加齢黄斑変性などに比べると圧倒的に少ない。しかし、少ないとはいえ一定の数で必ず眼腫瘍患者は存在し、明日にもあなたの外来を受診するかもしれない。眼腫瘍の手術はしていなくても、適切な検査を行い、正しい診断を行うためには眼腫瘍診療の仕方を修得する必要がある。本書は眼科のレジデントから専門医まで、皆に勧めたいまさに必読の書である。

兵庫医科大学教授・眼科学
三村 治

B5 頁 476 2015 年 10 月
定価：本体 18,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02394-8] 医学書院刊